



新 世界洋上紀行

洗練のヨットスタイルを愉しむラグジュアリーな海の旅

第13回 Phoenix Reisen "AMADEA"

フェニックスライゼン「アマデア(初代飛鳥)」、夏のアイスランドクルーズ〈前編〉

1991年に三菱重工長崎造船所で建造され、日本に本格的なクルーズ文化を根付かせた初代「飛鳥」。現在、ドイツのクルーズ会社フェニックスライゼンに籍を移し、「アマデア」号として北ヨーロッパを中心に運行されている。蒸し暑い日本から遠く離れた、フィヨルドの海輝く夏のアイスランド周遊クルーズ。その後編、「アマデア」はアイスランドの東端に到着した。

text: Masaaki Higashiyama
photo: Masaaki Higashiyama
special thanks: Phoenix Reisen GmbH
Mercury Travel
<http://www.mercury-travel.com/phoenix/>

8/12 セイデスフィヨルド(アイスランド)

昨晩はやや波が高かったが、その割には「アマデア」の揺れは少なかった。朝目が覚めたときもキャビンの丸窓から除く海は白波が立ち、少しぐらい揺れてもおかしくないような感じ。しかしフィヨルドに入ると一転、鏡のような静かな海を行くクルージングに変わった。

2日間の終日航海を経てアマデアは午前8時、アイスランド東部のセイデスフィヨルドへ入港した。風の音しか聞こえない港……。それもそのはず、この街にはホテル1件、バー3件、ガソリンスタンド1件、それだけしかない。

この船では自転車を借りることが出来る。町の散策にしても、徒歩に比べればはるかに遠くまで行くことが出来る。「アマデア」の美しい船体写真を撮ろうと、対岸の方へ走り出す。途中、坂道でへばった。それでもがんばって絶好の撮影ポイントを見つけた。頂上に少し雪を残した高い山を背景に、きらめく波にただよう「アマデア」をしばし見ている。実に美しい船型だった。

日曜の自転車散歩を終え船に戻ると、ピュッフェランチが始まっていた。今日は船尾のプールデッキでいただくことにした。それにしても思ったより日差しが強い。こんなに緯度が高い場所でこれほどの日差しなのだから、日本はさぞかし大変な暑さだろう……。

午後5時、セイデスフィヨルドを出港。舳が外れて離岸を試みるも、対岸からの風が「アマデア」を岸壁へ戻してしまう。1本だけ舳綱を繋いだままで、船尾のスラスターを駆使し、ようやく離岸できるまで30分程度を要した。タグボートもない小さな港では、キャプテンの経験がものをいう。

ディナーの後、まだ空が明るい午後9時、プールサイドでローパーパーティーが行われた。このクルーズはアイスランドの後グリーンランドへ向かうため、いわば北極圏への洗礼式を兼ねたパーティーである。

船客は頭にクリームのようなものを塗りたくられ、顔に何かのはんこを押され、鎮座した司祭へ一礼する。すると北極圏への通行手形をもらえる。「ドイツ人ってちょっとクレイジーでしょ!」と、隣の女性が笑いながら話してくれた。

8/13 アークレイリ(アイスランド)

午前8時、「アマデア」はアイスランド北部の街アークレイリに寄港。ここはミッドナイトサンシティとも呼ばれ、夏場は日が沈まない。

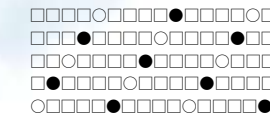
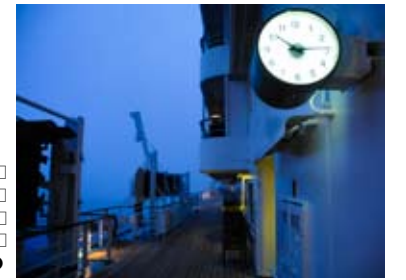


ここではレンタカーを借りてみた。東へ走ること約100キロでミーヴァトン湖へ到着。ここは野鳥の宝庫で、世界で一番多くの鴨が生息している。アイスランドと日本の共通点といえば、それは火山が豊富な島国であるということ。黒く固まった溶岩、プレートが押し合い、褶曲し、ひび割れた大地、轟音を立てて流れ落ちる滝……。その大地の力強さを利用した地熱発電と水力発電が、人々の生活を支えている。

アークレイリの街に戻って、ぶらぶらと散策してみる。カフェのテラスに座る人たちが楽しそうに過ごしている。きっと短い夏、貴重な日差しを浴びて一年でいちばん素敵な季節を謳歌しているのだろう。

昼過ぎに船に戻り、最上階の船首に面したピスタラウンジでのアフタヌーンティーに行ってみた。綺麗に作られたケーキやサンドウィッチ、丁寧にポットで出されるアッサム紅茶をいただき、美しいピアノ演奏に聞き入る。その後はアマデアスパ。海に見える広々とした個室でアロママッサージをたっぷりしてもらい、長旅の疲れを取り除いた。

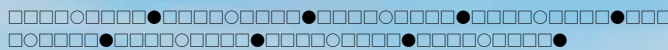
午後6時出港。今日は船内すべてのバーで7時までハッピーアワー(ドリンクが半額)となっており、私はなんとなく気に入っているコペルニクスバーでブラディマリーをいただくことに。ここのフィリピン人ウェ이터とはすっかり友達である。



その後はメインダイニングにてディナー。明日下船ゆえ最後のディナーということもあり、ちょっと欲張って注文してみる。メインディッシュのステーキにはマスタードが混ぜ込まれたマッシュポテトが添えられ、ステーキの濃厚なソースは絶品の旨さ。焼き加減をミディアムレアと注文して、そのとおりの火加減のステーキが出てくるのは、船客600人だからこそなせる業である。

最後の夜は思いっきり楽しもうということで、アトランティックラウンジのショーを見に行く。今夜は50'sがテーマ。「Peggy Sue」、「Oh Boy」など、軽快なナンバーをややコミカルに歌って踊って場内を盛り上げてゆく。ドイツ語や英語なんてわからなくても楽しめる。すごく楽しかった。

ショーの熱気を冷まそうとプロムナードデッキに出てみる。時計の針は10時を指していた。まだ空は少し明るい。霧深い海を、「アマデア」はしなやかに進んでいく。



8/14 イーサフィヨルド(アイスランド)

清々しい朝、デッキに出てみると少し肌寒いほどだ。「アマデア」はアイスランド北西端の街イーサフィヨルドにたどり着いた。

ここは古くから交易の中心として栄えてきた。特に漁業、鱈の漁で発展してきた。15世紀のノルウェーに始まり、その後ドイツやイギリスとの交易に発展した。夏はトレッキングやバードウォッチング、冬はクロスカントリーやオーロラが人気である。

小さな町の案内所で電動スクーターを借りてみた。このスクーターのバッテリーでどれぐらいの距離を走れるのか聞いてみると、「まあイーサフィヨルドをぐるっと1周する程度は十分。隣町までは行かないでね」とのこと。行かないでね、と言われると行きたくなくなってしまう。

最高時速20キロの電動バイクを駆ってちょっとツーリング。初めはぎこちない運転で、大型トラックが追い越す風圧にちょっとビビリながらも、だんだんと運転が慣れてくる。どこまでも続く何もない道を大きなバックバックを背負って歩く男女とすれ違い、小さな音を立てて流れる小川のほとりで揺れる白い綿帽子の花を見つけては小休止。バッテリーが減りだしたところで街へ戻り、ガソリンスタンド前に置かれた木の椅子に座り、ありがたい日差

しを掠め取るようにちょっと日光浴を楽しんだ。

「アマデア」は、日本で建造され、日本人のために造られた客船だが、世界的に見ても非常に優れた客船である。この大きさにしてはパブリックスペースの数も多く、船を1周できるプロムナードデッキも備わっている。そしてアトリウムの吹き抜け部分、田村能里子氏によって描かれた4デッキにわたる壮麗な壁画「季の奏(しらべ)」の色彩と繊細さは、我々日本人の美意識そのものであり、そこに描かれた人の顔、表情には豊かな何か秘められている。日本生まれの「飛鳥」が、北のヨーロッパで「アマデア」として元気に活躍していることを、あらためて嬉しく思う。PB.

INFORMATION

2013年春、「アマデア」が徐々に日本に凱旋帰港する。145日間にもおよぶ世界一周の途中で、2月26日バンクーバー発～大阪27泊のほか、3月25日大阪発で、基隆へ7泊、シンガポールへ17泊の区間乗船が販売される。飛鳥の時代に乗船した人には懐かしい再会。好評発売中につき、良い部屋はお早めに。

2013年 初代飛鳥「アマデア」 日本凱旋帰港クルーズ

2/26 発	バンクーバー - 大阪 27 泊	5,999 ユーロ～
	(日本からバンクーバーへの航空券付)	
3/25 発	大阪 - シンガポール 17 泊	3,999 ユーロ～
	(シンガポールから日本への航空券付)	
3/25 発	大阪 - 基隆 (台北) 7 泊	1,849 ユーロ～
4/1 発	基隆 - シンガポール 10 泊	2,363 ユーロ～

■問い合わせ先：マーキュリートラベル TEL: 045-664-4268



Profile

東山真明

海と船の旅をこよなく愛する、海外クルーズエージェント。大型客船よりも、プライベート感ある上質な「ヨットスタイル」のクルーズにこだわり、国内で小型船クルーズを取り扱う4社による「スモールシップ アライアンス」に加盟、その啓蒙に励む。マーキュリートラベル代表。

■マーキュリートラベル TEL: 045-664-4268

<http://www.mercury-travel.com>